小学校入門期における「目的をもって情報を読み、活用する力」を育む国語科の授業

北海道：札幌市立緑丘小学校　校長　田中　義直

１．はじめに

新しい令和の時代が幕を開け、程なくして私たちの暮らしを襲った新型コロナウィルス感染症。突然の全国一斉休校、そして感染症予防を最優先した新たな生活様式のスタート。予想した以上に長きに渡った、これまでの当たり前が当たり前ではなくなった生活は、子どもたちの成長にも大きな影響を及ぼした。令和５年４月に入学した新一年生は、他者との関わりが活発になり始める３歳頃から、マスクを着用して互いに接触を避ける生活を余儀なくされた。幼稚園等の先生をはじめ、周囲の大人たちも多くがマスクを着用しているため喜怒哀楽の表情に触れることがほとんどなくなってしまう。異年齢・同年齢の子どもたちと関わる機会も減少する生活が子どもたちのスタンダードとなった。

それから約３年が経過し、今、私たちの生活はコロナ禍前に戻りつつある。少なくとも我々大人は、今の状況をそう捉えている。しかし、子どもたちにとってはどうか。特に、今年度入学した一年生にとっては物心がついたときからコロナ禍での集団生活が始まっており、マスクを外した顔と顔をつき合わせた中で、人と人との関係づくりを初めて経験すると言ってもよいのではないだろうか。実際に４月当初、これまでとは違った環境の中で生活することに悩める子ども、登校に不安を抱える子どもの姿がしばしば見られた。

このような問題を抱える中で、日常でのきめ細かい子どもへの関わりはもちろんのこと、国語という教科で「言葉を使ってコミュニケーションを図る力の育成」や「伝え合う、分かり合うよさや楽しさを感じる体験」は急務であると考えた。

以上のことを踏まえ、入門期である一年生の６月に実践した「くちばし（説明的文章）」について紹介する。

２．研究実践　【１年上『くちばし』（光村図書）】

小学校に入学して初めて出合う説明的文章であり、この出合いは、これからの説明的文章の学習に対する意識に大きな影響を及ぼすと考えている。

・情報に触れ、新しいことが分かる楽しさ
・仲間とともに情報を読み解く面白さ
・言葉によってコミュニケーションを図る素晴らしさ

これらを、入門期の子どもたちが味わうことのできる授業を目指して取り組んだ実践である。

⑴ 初めての説明的文章との出合わせ方

<u>知的好奇心を高める教師の関わり</u>

小学校に入学する前の子どもの読書経験（特に説明的文章に触れる経験）は、教師が思っ

ている以上に個人差が大きい。そのため、教材文に触れる前に子どもの知的好奇心を高める場面を大切にする。それが「国語の勉強って楽しい」と思う子どもを育てる大事な第一歩であると考えた。

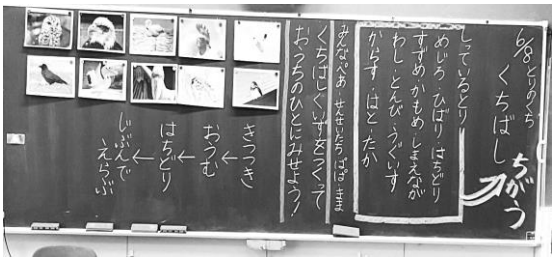
まずは、「くちばしって何だろう」「くちばしのある生き物は」「鳥のくちばしはみんな同じなのかな」を全員で考える。子どもはこれまでの生活経験と結び付けて発言するが、すでにこの時点で知識や経験値からくる関心の差が感じられる。その差を埋め、どの子も意欲を高めるためにも大切な場面である。

学びの見通しをもたせる教師の関わり

学びの主体である子ども自身が、単元を通しての学習の見通しをもつことは、主体的な学びを実現させるためには不可欠である。また、教師が一方的に与える見通しではなく一年生なりに自分たちで考えたという自覚をもてる学習の見通しになることを大切にした。

担任は、子どもの意識の流れに合わせてくちばしのクイズを投げかけ、子どもの興味関心を刺激する。ICT を活用して鳥のくちばしの写真を見せ、それだけではどんな鳥だか分からないという子どもからの声で、くちばしの形のヒント、くちばしの使い方のヒントを出す。子どもたちはクイズの答えを当てようと頭をひねって考える。クイズの後には、どの子どもからも「私もクイズをつくりたい」という言葉が発せられた。

子どもたちの関心が高まったところで、どんなクイズをつくりたいのか、クイズをつくってどうしたいのかを確かめるとともに、「教科書にもくちばしのお話があるので、お話を読んでクイズをつくってみよう」と教材文を読む目的意識をもたせた。



入門期から、子どもが取り組む学習の見通しをもつ意識を育むことを大切にする

⑵ 学ぶ意欲を高め言葉の力の獲得につながる言語活動

視覚から教材文の世界に浸らせる

この時期の子どもにとって、文字言語に対する抵抗は決して小さくはない。入学前からインターネット上の動画情報等に慣れ親しんでいる現代の子どもであれば尚更である。このことを踏まえて、まずは教材に登場する「きつつき」「おうむ」「はちどり」の絵を掲示し、その相違点や知っていること、感じたことなどを自由に表出させる。教材文に記されているくちばしの形や使い方に関連する発言も子どもたちから数多く聞かれ、教科書の文章に触れることへの抵抗を減らすことへとつながった。

常に言語活動を意識させることで、主体的な学びを促す

くちばしクイズは、子どもたちにとって言葉の力を獲得するための活動であるとともに、

教材文に向かう原動力となる。それ故、この言語活動への意識が薄れてしまうと途端に教師主導の受け身の授業へとなってしまいかねない。一年生がくちばしクイズをつくることを活動の目的として意識しながら教材文に向かうためには、教師による両者の結び付けがとても重要になってくる。

「クイズに必要なものは何だろう」という言語活動に関する投げかけから始まり、子どもたちの「問題！」「くちばしの絵！」「答え！」「ヒント！」という発言を受けて、「では、今言った『問題』や『くちばしの絵』『問題の答え』『ヒントになること』を見付けてクイズをつくろう」と、言語活動と教材文を読むこととのつながりを子どもたちに意識させた。この教材文の特徴を捉えることが、きつつきとおうむ、はちどりを説明している文章を比べて読むという情報の比較、関連付けにもつながっていった。読む目的や視点をもたせられたことが、このような子どもの学びとして表れたと考えられる。

言語活動が、説明的文章の情報の特徴を捉えて読むことにつながる

前時の「きつつき」と本時の「おうむ」の文章を比べながら説明する

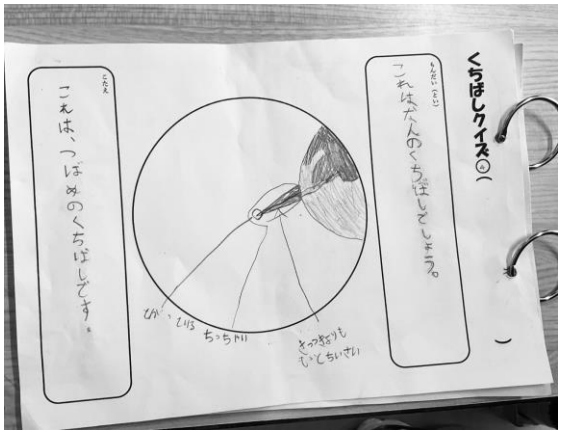
自分の学びを振り返り、次に学びをつなぐ子どもを育む

学習の振り返りの場面を設定し、自分の学びを自覚し次に生かす子どもの姿を目指した。振り返る内容は学習経験に応じて設定するが、本単元では「分かったことや楽しかったことを書こう」と働きかける。最初は「きつつきが虫を食べているって分かってびっくりした」など、教材文に記載されている内容をなぞる感想がほとんどであったのが、次第に、他の説明の部分と比較して感じたことを記入したり自分なりの疑問について触れたりする振り返りが見られるようになってきた。

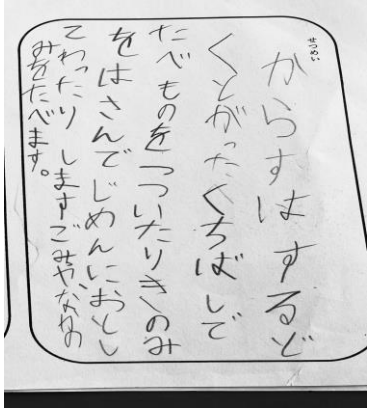
一年生であっても学びを振り返る経験を積むことで、自分を見つめる力は着実に高まる。先を見据えて、今、目の前にいる子どもたちに何を経験させて、どのような力を育むことが大切なのかを、我々はしっかりと捉えることが大切である。

⑶ 学びを活かして、自ら発信する

きつつき、おうむ、はちどりと教材文でクイズをつくったことを活かして、子どもたちは自分のオリジナルのくちばしクイズをつくることに挑戦した。単元の初めから、子どもたちが目指してきた活動である。一年生にとって決して簡単な取組ではないが、全員が自力でクイズを完成させることができた。



一年生がつくったくちばしクイズの実際①
「問い」「くちばしの絵」「答え」



一年生がつくったくちばしクイズの実際②
「ヒント」

そして、いよいよクイズ大会だが、問題を出して相手の反応に合わせてヒントを出すというのは多くの子どもにとって経験がないため、その進め方について丁寧に確認を行う。

① T:まず、何を話せばいいのかな　C:「問い」を出す　C:これは何のくちばしでしょう

② T:答える人は　C:これは〇〇のくちばしです

③ T:答える人が間違っていたり答えが分からなかったりしたら
C:ヒントを出す　C:食べるえさとか、食べ方の説明をする

クイズの進め方を確かめることで、説明的文章における問いと答えや物事の順序について意識付けし、学級内の友達を相手にしてクイズを出し合う。その後、子どもたちは、家庭でおうちの人にくちばしクイズを出すことで、初めての説明的文章の学習を締めくくった。

３．実践を通して

学校や地域によって多少の差違はあるが、一年生は入学して概ね２か月ほどで説明的文章に出合うことになる。まずは、この出合いを誰にとっても「分かった、できた、楽しい」ものにすることが教師には求められる。子ども一人一人の言語体験の違いと教材の特徴、そして、この単元で培う言語能力、これらが交わるところに言語活動のヒントが隠されている。今回は、授業検討を重ねた結果、「くちばしクイズ」を単元全体を貫く活動に据えたが、そのことによって、まだ入学して２か月の一年生が

・説明的文章を、目的をもって読み進めることができた
・自分なりの感想をもち、学習の終わりに振り返ることができた
・学習に見通しをもつとともに、これまでの学習とつないだり比べたりすることができた

ことは大きな成果である。入門期であるからといって教師主導で子どもを過度に導くのではなく、入門期であるからこそ子どもが能動的に情報に触れ、自ら発信することに喜びを感じられる授業が、子どもが学びの主体となる国語科学習につながると考える。

【授業実践】　札幌市立緑丘小学校　教諭　森下　恭時